



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

|            |   |
|------------|---|
| Title      | 教職大学院における「実践化」「高度化」の多面的検証を( fulltext )  |
| Author(s)  | 三石,初雄   |
| Citation   | 東京学芸大学教職大学院年報, 3: 0-0   |
| Issue Date | 2015-03-31  |
| URL        | <a href="http://hdl.handle.net/2309/138734">http://hdl.handle.net/2309/138734</a> |
| Publisher  | 東京学芸大学教職大学院   |
| Rights     |   |

## 教職大学院における「実践化」「高度化」の多面的検証を

三石 初雄（帝京大学大学院教職研究科）

専門職大学院としての教職大学院が発足して7年になる。教職大学院自体の教育と研究が蓄積されてくるとともに、その蓄積とは別に残された課題、見直すべき課題、新しい課題が見え隠れしている。「今後の教職大学院におけるカリキュラムイメージに関する調査研究」（文部科学省先導的の大学改革推進委託事業 2014年3月）での既存教職大学院の実践と全国実態調査を基にしたカリキュラム改革の課題整理はその一端であるし、各教職大学院・教育学研究科で刊行している『年報』等を集録されている取り組みと検証にもその様子をうかがうことができる。

また教員養成の「修士レベル化」が公的に議論されて久しいが、2013年以降の国立大学法人の「ミッションの再定義」設定過程での既設大学院の見直しと専門職大学院（教職大学院）への移行奨励策の提示は少なくない影響力を持つ。2014年12月に開催された日本教職大学院協会研究大会では、既設の国立大学法人19教職大学院に加えて2015年度開設2大学院、2016年開設18大学院という予定が紹介されていた。このような動きは、戦後日本の教員養成ならびに現職教育にとって大きな転換点を想起させる。

この他、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」（中教審答申、2012年8月28日）では、「学び続ける教員像」と“教育委員会との連携”のさらなる強化を提言するとともに、教師の力量に関する「専門職としての高度な知識・技能」にも言及している。その内容は、「教科や教職に関する高度な専門的知識（グローバル化、情報化、特別支援教育その他の新たな課題に対応できる知識・技能を含む）」「新たな学びを展開できる実践的指導力（基礎的・基本的な知識・技能の習得に加えて思考力・判断力・表現力等を育成するため、知識・技能を活用する学習活動や課題探究型の学習、協働的学びなどをデザインできる指導力）」「教科指導、生徒指導、学級経営等を的確に実践できる力」が想定されている。教科指導やカリキュラム開発能力、課題解決的協調的学習等への言及は、教職大学院発足当初の議論からすると大幅な拡張的見解が示されていると見ることができよう。

このような教職大学院内部からの「高度化」「実践化」に関する省察とともに、これらの動向に関してのいくつかの異なる視点からの論究もなされていることに留意していく必要がある。日本教師教育学会年報（第23号）では、「教師教育の“高度化”を考える」を特集し多面的な視点からの考究を試みている。例えば、「専門職的自律性の拡大」を教育政策とセットして促すこと（牛渡淳「教師教育の高度化とその課題」）、教師の職能開発にあたっては「支援する」「教職員の主体的な取組を重視する」こと（古閑千尋「教職研修機関における教師教育の“高度化”とは」）、教職の専門職化と教育学の高度化との往還の必要性（石井英真「教員養成の高度化と教師の専門職増の再検討」）、その他熟達化過程に関する他業種での事例研究（中原淳『職場学習論』）、等も提起されている。このような修士レベルでの教師教育とその検証を多面的多角的総合的に議論することが必要であり、可能となりつつあるのではなかろうか。